

同 定・識 別 に つ い て の 一 面

— N D C 新 版 索 引 作 業 か ら —

Index to Nippon Decimal Classification in Preparation

—Ordering by Sounds or Letters—

中 村 初 雄

Hatsuo Nakamura

Résumé

“Identifying and distinguishing” is a starting point of cataloguing. To be able to identify, one must be in possession of knowledge, what differences may be possible among the matters or subjects. When he succeeds to verify the nonexistence of differences, he can identify the subject and *vice versa*. It is self-explanatory clear, so far as the subject concerned is fixed and consistent. But what is the case when the subject itself is affected by the changing environment? Let us take an example of identifying of an individual person. One might say “Mr. J. Smith is no more Mr. J. Smith of yesterday”. John Smith can, however, identify himself by a seal (stamp) or sign. But both of them can serve perfectly as means of identifying of individual person. Though as many similar seals can be made as we want, each of them is a little bit different from each other. On the other hand one can sign in many ways, but there are always some identical strokes or touches in them.

The fact, that both of them are available, must be borne in mind when we cope with situation under changing world wisely.

Japan Library Association, Committee of Classification is now revising Nippon Decimal Classification (N. D. C.). The second galley proof of main table was distributed among nine Committee members, and the collecting of candidate terms for index began last Spring.

Committee carried out the task in two steps, first by each subject-field and second by collating with other existing general word-lists, rather mechanically.

After the second step, the total number of indexing terms increased to 27,000 from the 20,000, which is the sum of the terms directly derived from tables and additional terms from the encyclopedia or bibliographies for the special subjects. It is curiously enough, that the increase-rate at the second step shows in nine syllabary-sets almost constant value, over 30%.

Additional candidate terms, which were collected in the second step by the collation of general word-lists (glossaries, subject heading lists, relative indexes to classification) were exceedingly more than that of the first class.

Some problems, such as voiced sounds and long vowels, distinguishing by characters in the case of same pronunciation, are mentioned and clarified but without conclusion.

はじめに

- I. 音(字)順索引の宿命
- II. NDC 8 版の索引編成の方針
- III. “索引標目” 拾い出しの作業
- IV. “索引標目” のカード化
- V. “索引標目” カードの排列と追加

はじめに

最近私は弥吉光長先生喜寿記念論文集(1977年9月刊「図書館と出版文化」)の中で、大数観察原理の効用について言及した。図書館の機能の重要な部分として、各種情報をつめ、使用しやすく整備しておくことがあげられている以上、悉皆調査というものが尊重されるのは当然なことである。

しかしながら、たとえば産業界の専門図書館の利用者要求を調査するにあたり、一次産業全般あるいは二次産業全般にわたっての悉皆調査といったものは不可能に近い。また、小・中・高等学校全体の図書館についての一般調査を実施するのも不可能とは言わないまでも、経費の面からいって問題がある。それよりもっと問題なのは、調査データを適正に評価し、何らかの傾向なり指針を見出すことが至難となってしまうことなのである。比較的均質と認められるいくつかの標本、たとえば電気機器製造業者20社なり30社についての実態調査からは始めることもあろう。あまり多数の個体で、処理しきれないような場合には、1/20、1/50、1/100といった標本抽出による調査の方が実際のこともあろう。

時間の制約を受けた場合、それは道具を作成したり、改訂していくような場合につきものであるが、この大数観察原理をふまえての予測、推論が必要なことは言うまでもない。これは理屈ではなくて、戦略とも技術、——技術といっても非常に大まかな——ともいうべきものであろう。

索引項目(完成した場合の相関索引での項目を指すのではなく、それになる候補の用語、名称、句などのことで、簡単にするため、以後“索引標目”と呼ぶことにする。)の拾い出しという作業をするチャンスに恵まれたのを機会に、その作業過程で気づいた、いくつかのことについて、報告させて頂く。

I. 音(字)順索引の宿命

私が、拾い出しの一端をになうことになった“索引標目”は、日本十進分類法(森清原編)の新版の相関索引のものである。同定とか識別というこの語は、目録法における原点ともいべき概念であるが、その内容・深度についてはいろいろと解釈されているようである。同定といった語については、こういった語が図書館関係の人達に用いられるようになったのは、比較的新しいことではないかとさえ思う。広辞苑には採用されてはいるが、私共の仲間間で、“同定化”“同定実験”といった用語が用いられるようになったのは、ここ数年来のことである。それまではこの内容は、さまざまな別の表現で代表されていたのである。

武田虎之助氏が、分類論でよく、“相似性と相違性”と言っているのもその一例である。氏はこれを、アリストテレスの範疇というものに結びつけて、一般読者、聴講者にわからせようとして、氏の巧みな話術・論法で説いておられる。

分類ということは、[本質的]実体に対してか、それとも事件に対してか、それともそれらに対応する人々の

心の動きに対して行うのか、といった議論も行われたりもする。

実際に存在する分類表は、いろいろのものが混在している場合が多い。なるべくスッキリさせようと、各種の補助表を用意したり、ファセット分類のように、いくつかのカテゴリーを設定して、ファセット化を統一的にできるようにコントロール（調整）しているものも出現した。しかし、人々の多様なニーズ（要求）に対応してゆくためには、索引の助けを借りなくてはならない。そして、その索引は今後次第に大きなものになってゆく傾向は否定すべくもない。それは必要悪であると見る人もあろうが、これなくては、分類は行い得ない、と言ってもよい。¹⁾

アリストテレスの範疇は、古くからひきあいに出されている、ソクラテスに関する記述²⁾から知られる。実体、量、質、関係、能動、受動、場所、時、姿勢・状態、付属物の10種である。

この中の実体だけを、ポルフィリーの木式に二分法で分類出来た時代もあったろう。何が何処で何時、という式に解決して細分化が出来た時代もあろう。ところがその何が、というものが実体から、過程だとか状態・付属物のように偶然的のものにも移ってくるようになってから、識別は次第に困難となってきた。多くの人が、質は同一、相似のものとみなして、量的にだけ取り扱うことを自分の専門とするようになってきた。このような時代になってからの分類表に対する索引はもはや混沌以外の何ものでもなくなった。それを結びつけておくのには五十音順なりABC順といった全く機械的なものにたよらざるを得なくなってしまった。

今回はからずも、日本十進分類法の改訂版を編集するにあたり、その索引をABC順から五十音順にするという業務の一端に関与する機会を得たので、いくつかの気づいた点を列挙しておいて、後日の参考に資したいと思う。

II. NDC 8 版の索引編成の方針

既に50年近くも使われてきて、改訂を重ねること7回というこの標準的一般分類表に対する“索引標目”の選出という事と、件名標目表・シソーラスなどの用語選定とは同一視することの出来ないものがあることは論ずる必要はない。しかしながら、無制限に、何からでも項目を出しておけばよい、というわけにもいかないもので、それぞれの検索用語として考え得る語・名称やそ

れらの順列・組合せについて評価・検討を行って取捨選択はしてゆかなければならない。その基礎になるべき判断基準は言うまでもなく、利用者のニーズ（要求）である。その他にも所謂“文献上にあらわれる形”“日本語としての語学感覚”といったことも問題になるが、一番統一をはかるのに困難を覚えたのは、各種各様の図書館で資料組織にあたる人達の概念把握の様相を類推してゆかねばならないことであった。分類に従事する人達は、一般利用者に資料を出しやすくするための組織を作りあげてゆけば良いのだと、割り切って考える人達ばかりでないところから、言語の選び方にも、神経をつかわなければならぬ、となると作業は一層困難となる。

私どもは、この問題には、出来る限り恣意的にならないように、出来るだけ機械的に取り扱ってゆこうとした。既に改訂の過程で使用しないことに決定・発表した用語は別として、なるべく従来から使われている項目は残しておいて、新規に必要な主題なり、用語の追加を行って、2万乃至3万程度のものにおさえようとした。

項目の排列については、何年かにわたる全国図書館大会の際での討議を、委員会なりに更に反すう検討した結果、五十音順に決定した。“従来のものを変更させるには、それに相当する決定的な理由がなければ”といった強い反論もあり、また現7版のABC順索引が使いにくい、と言われている原因の大半はその欄外見出しが不十分であったことからくるのであるという弁護論もあった。私自身は論理的に、決定的な、変更理由というものを打ち出すことは出来ない。しかし図書館での実務を念頭におくとき、国立国会図書館の索引、また国際十進分類法の索引が、二版とも引きつづき五十音順排列であるということは重要なことである。追加を必要とする項目を発見してゆくものにもこれは非常に有利な点であった。

この利点は、今後の改訂、補遺などについても言えることであると思う。

III. “索引標目” 拾い出しの作業

9名の委員、所属別で分けると、図書館学教員4、国立国会図書館1、公共図書館1、大学図書館2、³⁾ 学校図書館1で構成されているが、各人が各々、自分の主題分野に関係ある範囲を分担して、本表に記載されている概念のみならず、その同義語・下位概念などで、書名中の要語として出現すると考えられるものの列挙から出発した。この段階において、各人はそれぞれの分野の、専

同定・識別についての一面

門辞典、便覧、用語解説を充分に駆使して、候補となりそうな用語を可能な限り拾い出すことに努めた。本来ならば、関連分野での諸参考資料も駆使して追加すべきであるかもしれないが、それは時間の関係で、次の段階、五十音順にしたうえで、一般的百科事典、索引類で行うことにした。⁴⁾

IV. “索引標目”のカード化

この段階は、全員が統一した作業をすることが、望ましいので、一応の約束・規程を作成した。立案は長年にわたる経験者、森 清委員にお願いした。昭和52年4月9日頃から、次第にかたまってきた規定は、要領を紹介すると次の如くである。これは成案となった場合の凡例ともなるべきものであろうから、まず前7版における凡例と対比させて、その相違点のみについて述べよう。

前版の凡例は10項からなっているが、その1は変更されている。2～4はローマ字つづりに関するものである。5は、索引の使用法についての序説への参照であるが、これは、“索引標目”カード化にあたり、各委員が思想統一しておかねばならないことなので、銘記しておいた。6～10は今回も踏襲するので、順序は変えたが、ほぼそのまま残すことにした。

1. 7版では地理記号索引は別建てとして24頁をあてているが、新版ではそれらの標目は*印を付し識別可能にして統合しておいた。⁵⁾
- 5.⁶⁾ 索引は、一つの標目について、その観点や関連性に応じていくつかの分類番号を列記した。また複合語標目については、検索上必要と思われるものは双方から検索出来るように配慮した。

例 結婚 (社会)	367.4	米	611.33
(民俗)	385.4	— 価格	611.33
(民法)	324.62	— 栽培	616.2
(倫理)	152.2	— 貯蔵	616.29
解剖学	491.1		
家畜—	649.1		
… … …			
家畜解剖学	649.1		

排列は五十音順となったので、新規の約束・規程を必要とした。なるべく、広辞苑二版で採用している方針に準ずるようにした。

1. カナの清・濁・半濁音は排列上区別をしない。但しこれらが同一順位になる場合には、清・濁・半濁音の順にした。

例 価格, 化学, 雅楽
版, 晩, パン

なお拗音促音に用いる小字は大字と区別せずに排列するが、同一順位になる場合は直音のあとにした。

例 美容院 (ビョウイン), 病院 (ビョウイン)

2. かなづかいは現代仮名づかいに従った。但し助詞の「を, は, へ」は発音通りに「オ, ワ, エ」とした。

連濁・同音連呼による「ぢ, づ」については「ジ, ズ」で示した。例えば, 緋縮緬 (ヒジリメン), 三日月 (ミカズキ)。オ列長音例えば, 東京はトウキョウとしたが, 大阪, 狼, 氷の如くに旧仮名づかいで, ホとしていたものは, オオサカ, オオカミ, コオリのようにした。

3. 外来語, 外国語, 地名, 人名の仮名書きは広辞苑二版に従い次の如くに統一した。⁷⁾

ビタミン→ビタミン

ヴァイオリン→バイオリン

ゼット機→ジェット機

ジーゼル機関→ディーゼル機関

(但しフィリピンはそのまま)

4. 外来語, 外国語, 地名, 人名に用いる長音符“ー”は排列上無視する。

例1. ピカブ, ピーカーブ, ピーカーブーなどが一括され, その後ヒカブン, ヒカヘがくる。

例2. 古版本, コーヒー, コピー, 古筆, 呉服

5. ABCの仮名書きは, ph(ペー・ハー)以外は英語式による。Hはエッチと読みエイチと読まない。⁸⁾

V. “索引標目”カードの排列と追加

第一次作業, 即ち各人が主題分野を分担して候補用語拾い出しを行いカードを作成した結果, 約20,000枚のカードが作られた。各委員はそれぞれ自分の作成したカードを, 表記の第1字目のみによる区分をした上で, 持ちより, 五十音別のグループ化を行い, それぞれの委員に再配分した。

従来は何らかの関連で, 自己の専門に近いものを分担していたが, 爾後は機械的に, 文字順の責任分担とし, 追加・訂正なども主題事典などによらず, 一般的参考資料によることとなった。

配分区分は, アーオ迄の人もあれば, シ1字分 (但し枚数は全体の14%に達する) の人も, マーワまで14字分 (枚数では12%) といろいろであった。

各委員はそれぞれを、完全な五十音順になおし、一般百科事典、書名目録、その他在来の分類表索引とつきあわせて、更に候補となり得る用語、索引標目を追加していった。追加カードは、従来の主題知識関連で追加したもの（+印を付す）と識別出来るように△印を付しておいた。この識別が役に立ったかどうかは、更に除去を行ったり、索引が完成した上で判断すべきであろう。

この作業の結果、“索引標目”ファイルは26,000～27,000枚にふくれあがった。各委員とも、それぞれ30%から35%位の追加を必要と認めた。偶然の一致というよりも、むしろこの程度のものでは、表を基礎にして主題体系を念頭において作成した場合と機械的五十音順排列の道具を基礎に追加した場合と“索引標目”の比率は大体一致すると見てよいのではなかろうか。

第一表 マーワにはじまる“索引標目”の全体に対して占める割合の調査

記号	資料名 (1970)	マーワ	備考
I	NDC 7版索引 (1970)	約11.5%	M, R, W, Y
II	東京都立中央図書館 分類目録索引 (1972)	約11.9%	
III	BSH 改訂版 (1975)	約11.3% 約10.4%	頁数で概算 全標目数を6155 として計算、 マーワ633標目
IV	UDC 簡略日本語版 索引(1970)	約11.2%	頁数で概算
V	UDC 中間版索引 (1975)	約11.4%	〃
VI	世界大百科事典 索引(1968)	約14.4%	〃

悉皆調査でもなければ、完成した索引についての実態調査でもなく、候補としてあげた“索引標目”のマーワまでの14字分の調査であり、あくまでも予測・推定にもとづく、作業をすすめてゆく指針を得る為の調査である。

IとIIが一致するのは或る程度予想されていたが、実に見事な一致である。私共の作業での“索引標目”について、更に細部すなわち、各字毎の比較をしてみると、第二表の如くになった。

ここで、資料II、Vというのは第一表の記号を意味する。追加“索引標目”というのはファイルをその資料とつきあわせて、既存の標目と同定出来ず、しかも書名・

第二表 “索引標目”追加と典拠資料

初字	主題関連 で拾いあげ数	資料II		V		その他 追加/計 “索引標目”
		総数	追加 “索引標目”	総数	追加	
マ	172	237	35	479	13	1/221
ミ	164	245	33	443	12	6/215
ム	82	117	11	270	6	0/99
メ	86	127	28	263	24	4/142
モ	167	243	62	447	15	2/246
ヤ	89	156	48	264	36	1/171
ユ	164	192	29	496	18	5/216
ヨ	147	171	28	520	28	6/209
ラ	118	149	22	298	11	2/153
リ	352	407	53	916	16	3/424
ル	38	44	3	105	2	0/43
レ	158	201	26	476	16	0/200
ロ	203	248	24	457	9	2/238
ワ	64	87	11	122	7	0/82
計	2,004	2,624	413	5,556	213	32/2,662

論題名の中に頻繁に出現すると推定されたものである。“索引標目”はその都度カード化されてゆくので、次の段階すなわち、資料Vとつきあわせる場合の追加とは、原ファイルにも、資料IIにも出ていない標目である。従って、資料VをIIよりも先に原ファイルとつきあわせたとすると、そこでの追加の数は若干増になることも考えられよう。⁹⁾ 但し、そのケースは比較的稀であって、大数観察する場合、ほぼ同じと考えてよい。この二資料によって、30%強の“索引標目”増がみられたことは明らかである。

第三表 第一次作業での“索引標目”拾いだし

NDC 区別	本表にある 表現(用語・名辞・ 句)から直接作成	体系的・専門的 知識をふまえての “索引標目”追加
42	209	68
43	312	63
44	142	26
45	350	49
56	347	62
57	518	78
計 割合 %	1,878 100 84.4	+ 346 = 2,224 18.4/ 118.4 15.6/ 100

同定・識別についての一面

この“索引標目”増加、もっぱら一般事典、索引類を基礎に機械的に拾い出していった作業による増加率は、全委員とも30%前後であった。それ以前の、主題専門事典その他で、体系的に追加標目を拾い出していった場合の増加率については、NDC 区分42~45, 56, 57 で行った時の記録を第三表に紹介しておく。追加“索引標目”といっても、表にあった表現の転置なども混じってしまい、その識別は厳密には出来ないことがあるので、率としては、上まわった数字が出ていると見るべきであろう。

この表での“索引標目”カードはアークにわかれているのであって、その中で上記のマークに属するのは10分の1程度にすぎないが、次の如くに類推することが許されよう。全く新規な主題・論題に関連した“索引標目”を拾い出してゆくには、相当の時間をかけても、主題体系からの拾い出しでは不十分である。機械的に排列された資料とのつき合せによって、追加される“索引標目”の方が多く、かつまた、単位当りに必要とする時間もすくない。

それからまた、このことに関しては、排列規則も非常に関係する。そして、それには、次の凡例ならざる、内規のようなものが重大な意味を持つことがわかった。これは文章には書いたことはないが、一種の了解事項として、各委員が知っていたことである。強いて文章にあらわすと次のことである。

“原則的には、字順（ここでは表記の字順の意味）排列であるが、例えば保険、保健の様な場合、それぞれの複合語、術語がつづく場合には、字順にとらわれず、同じ漢字をまとめる。”換言すると、電話帳などで採用している方針をとり、一種の語順方式とでも言うべきものを導入することである。この了解事項は、ABC 順の7版索引の際もとり入れられてきたことであるが、ここでは、いくつかの実例について、その問題点を掘り下げてみよう。

事例を NDC 7 版の索引 (ABC 順) からいくつかとりあげる。

冶金・冶金学	YAKIN
物理——	BUTSURI——
化学——	KAGAKU——
冶金分析	YAKIN BUNSEKI
冶金炉	YAKINRO
冶金作業・冶金装置	YAKINSAGYO……
焼流し精密鑄造	YAKINAGASHI……

民族	MINZOKU
民族地理学	——CHIRIGAKU
民族学	——GAKU
民族問題	——MONDAI
民族性	——SEI
民族運動	——UNDO
民俗舞踊	MINZOKU BUYO
民俗学	—— GAKU
民俗音楽	—— ONGAKU
民俗誌	—— SHI

五十音排列になっている、東京都立中央図書館の索引では次の如くなっている。

焼流し精密鑄造	ヤキナガシ	——
冶金・冶金学	ヤキン・ヤキンガク	
化学——	カガク——	
物理——	ブツリ——	
冶金作業	ヤキンサギョウ	
冶金装置	ヤキンソウチ	
冶金分析	ヤキンブンセキ	
冶金炉	ヤキンロ	

民族	ミンゾク
民族移動	ミンゾク イドウ
民族運動	ミンゾク ウンドウ
民族学	ミンゾクガク
民族性	ミンゾクセイ
民族地理学	ミンゾクチリガク
民族問題	ミンゾクモンダイ
民俗音楽	ミンゾクオンガク
民俗学	ミンゾクガク
民俗誌	ミンゾクシ
民俗舞踊	ミンゾクブヨウ

最初の例では、五十音の関係で、破順は恢復され正順になっている。しかし次の例は、漢字の区分（ここでは両方とも、民族を民俗の前に出しているが、普通には、字画数などで前後をきめる。その方が機械的に統一をはかりやすい。）から、○○運動のあとに△△舞踊がきたり、○○問題のあとに△△音楽がきたりしている。これが、さきに述べた“一種の語順方式とでもいうべきもの”である。姓名の如くに、区切りのハッキリしたものの場合には、比較的適用しやすいので、電話帳や名簿には抵抗なしに導入されるこの方式も、索引の場合どうなのか

は、今後の研究課題でもあろう。

従来の索引には、無言の中に適用されており、それぞれ効果を発揮しているかのようにも思われるが、少数ながら何人かの方々は、「字順排列に徹しないと、検索に支障を来す」と訴えてこられた。

これも 同定・識別の際に考慮すべき重要な問題である。

梅干しと梅若流能とを一緒に並べようといったことは考えていないまでも、ある程度の破順は見逃して頂かねばならない、とも思っている。しかし、その程度をどこでおさえるかが問題なのである。一覧性のあるリストで、検索に差支えない程度とはどこなのか？ それは容易にはとらえられない線なのである。特に今度の索引では、地理記号索引も統合して作成するので、タイとタイ語といったものも並べたいと考えたすと、相当の破順を覚悟しなければならない。

- 1) 索引を重要視するのはよいが、そのことと、索引で示された記号・番号をそのまま用いるという態度とは一線を画して欲しい。索引による指示はあくまでも手がかりであって、それをもとに体系順の分類表にあたり、場合によっては表中にある参照番号によって案内された箇所の上位・同位・下位の番号の中から選び出すという態度が必要である。
- 2) ソクラテスは人である (1)、彼は身長 1.5 米、体重 45 kg (2)、鼻低く、徳あり、辛棒強く、しかも 大胆 である (3)、彼は 父 であり、教師 であり 市民 である。その身長は プラトン より低い (4)、彼は 学生 を 教授 しており (5)、死刑の宣告 を受けている (6)、彼は 現在市中 におり (7)、今も お尊敬されている (8)、彼は 現在立っており (9)、着物を着て サンダルをはいて いる (10)。
- 3) 大学図書館所属の 2 人の中 1 名は、最近日本図書館協会にかわった。
- 4) 索引原カード作成要領 (昭和 52 年 7 月)
 1. 各人の担当分野についての、しかもそこでの言葉の表現を主たる拠りどころとして、“索引標目”を作成する。
 2. 表中に出てくる参照は顧慮しないでよい。例えば

002 知識・学問一般の注に、科学方法論→116.5；学術奨励→377.7 とあっても、それは 002 担当者は顧慮しない。

3. 標目をその上位概念で限定する場合には、百区分程度の標目で行うが、相当柔軟性をもたせてもよい。〔カードからリスト化した段階で細調整も考慮〕

上記の如き、簡単な申し合せと、8 版本表再校ゲラ刷りをもとにして作業した。候補標目の列挙の仕方は各人がやり易い方法で行った。一つのやり方は、本表自体に赤線で指示したり、補記してゆく方法であった。
- 5) 新版索引では、外国語・略称などからの補助索引 (ABC 順) は考慮しているが、別建てはなるべく避ける方針をとった。
- 6) この番号は、対比を容易にする為に、前版索引での凡例の番号を使用した。
- 7) 但しこの規程は作業をすすめるに従い、統一をはかることが至難なことがわかり、ウとハ行の間に相互参照を入れておくことを、委員間で了承した。
- 8) この規定も、各索引者が統一的に守ってゆけるかは疑問である。NHK、TVA の場合は分りやすいが、UNESCO の場合などではむしろユネスコが定着化しており、ASEAN、ECAFE、JETRO の如き場合にもアセアン、エカフェ、ジェトロの呼称が用いられたらしてきており、ISO、ILO、JLS の如き短い略語の場合にも“アイ・エス・オー”式に読んでいかない場合も多い。これに対処する為には、やはり ABC 順の補助索引を用意しておかなければならない。
- 9) 何故、資料 I を用いなかったか、また II を V より先に用いたかは一応説明しておく必要がある。資料 I と II は標目としては一致しているものが多く、マ-ワの間で、II の方が約 260 程多く、しかも五十音順排列で、つきあわせがしやすかったからである。また II は、東京都立中央図書館の特殊な使用法を反映しているが、分類体系の異なる UDC の資料 V ではチェックに時間がかかりすぎたからである。概算であるが、標目 (用語・名称) チェックの時間では 4 倍位、番号チェックの時間では 1.5 倍かけても、問題をのこす場合が半分位残った。おそらく 4 倍の時間をかけても、問題は半減しないのでないかと推定される。